

昭和二十八年二月

国内経済概観

一、概況

生産は前月比微増——発電量は自流低下のため前月比一〇%の低下、

出炭好調、重油の需給窮屈化——工場在庫は概して減少

二、生産

供出米は二七百万石を突破し、特別集荷米との合計量は政府集荷計画量に近接——昭和二十七年中の農家経済現金収支は好転

三、食糧

輸出実績は前月比やや増加せるも依然低水準——輸入実績は微減——外貨予算使用高急増と自動承認制輸入の調整措置——特需契約高は引つづき順調就中物資契約の増加が顕著——外国為替収支は概ね均衡

四、貿易及び外国為替収支

商品市況は前月に引続き概して堅調、一部に思惑的需要も窺われる——小売市況は順調に推移——卸売物価は建築材料、繊維品を中心に〇・七%方統騰——消費者物価も一・二%統騰——輸出物価も反騰——株式市況は基調を一変して大幅反落

五、商況、物価

六、財政、金融
政府資金は引続き受超——預金の不振著るしく、日銀借入は著増——外国為替銀行の自己名義英磅勘定を通ずる為替取引及び外国為替銀行に対する英磅預託の実施

国内経済調査(上) 昭和二十八年二月

七、通貨

銀行券は一四億円の発行超

一、概況

当月に於ける経済各面の動きを見ると、先ず異常渇水による電力規制の影響もあり、生産は伸び悩みの形となり、輸出も前月に比し少々回復したとは言え、なお不振が続けた昨月下旬の月平均を一割方下廻る低位に止まつたのに対し輸入面に於ては引つづきかなりの高水準を保つた。殊にポンド手持の悪化に基く先行輸入削減不安に思惑的買急ぎも見られた為、自動承認制輸入の調整措置が講ぜられた。

商品市況は概して堅調を持続、小売商内も先ず順調で物価は卸、小売とも微騰を示し工場在庫も内需の好調と一部輸出船積の進捗に減少したものが多かつた。之に反し株式市況は採算を無視した相場昂騰が漸く限界に達し、基調は完全に一変して月中ダウ平均株価に於て一四%の低落を演じた。

財政金融面に於ては国庫金の対民間収支は防衛関係費の支出低調などにより月中三四〇億円の受超となり、年初来の受超は約九〇〇億円に上つたが銀行預金はその影響もあつて増勢全く停頓、反面、資金需要は比較的旺盛を示したので金融は通月繁忙を呈し日銀依存は急速に増大した。

二、生産

(生産は前月比微増)

経済審議庁の速報による二月の鉱工業生産指数は、昭和九—十一年基準一三・三と一月の確定指数一三一・六を一・三%方上廻つた。二月の生産が一月を上廻るのは例年のことではあるが、二十六年の四・三%増、二十七年の二・七%増に比し、上昇の幅が著しく小さかつた点が注目される。他方公益事業活動指数は異常渇水に基く発電量の大幅減に一八二・九と前月の二〇一・二を九・一%下廻り、ために産業活動総合指数は、一三八・六と前月より微減(〇・四%)となつた。

当月の生産状況を業種別にみれば、金属工業・化学工業・食品工業において前

月比減産がみられたが、その他は繊維工業の七・九%増、機械工業の五・一%増、窯業の三・七%増等いずれも増加を示し、製造工業全体としては一三三・二と前月を一・二%上廻った。金属工業、化学工業等の減産は、電力への依存度が高いことから、後述のごとき異常渇水による電力不足がひびいたためと考えられる。なお非耐久材の生産が、前年同期を一三%も上廻っているのに対し、耐久材の生産は逆に〇・九%方下廻っている点は、投資需要の鈍化、消費需要の漸増の反映として注目せられる。一方鉱業においては原油と亜鉛鉱を除いては、石炭(前月比一・四%増)をはじめ、いずれも僅かながら増産を示し、鉱業指数は一三六・七と前月を二・九%上廻った。

次に主要商品別にみれば概ね左の通りである。

(1) 鉄鋼においては銑鉄(二九八千トン)は前月比五%減となったものの、これは暦日数が少かつたためで日産は却つて微増、鋼塊(五二五千トン)は電炉の減産を平転炉増産で補つて前月と変わらず、普通鋼々材(三八〇千トン、八%増)は重・軽軌条・中形型鋼・厚板・大形棒鋼等建設関係需要をはじめ、特需の受注等もあつて総じて上伸。

(2) 非鉄部門では電気銅(六、四二九トン)が荷動きや、好転したことを映して三%増を示したほかは、電力事情の悪化旁々市況不況に電気鉛(一、四三三トン、一一%減)、亜鉛(五、〇八八トン、一一%減)、アルミニウム(二、四一〇トン、二二%減)いずれも著減。

(3) 化学工業では生産を上廻る内需旺盛を映じて過燐酸石灰(一一〇千トン、五%増)が上伸したほかは、硫酸(一二五千トン、一五%減)、石灰窒素(三八千トン、一%減)、苛性ソーダ(二五千トン、九%減)等電力事情悪化を主因に減産。

(4) 窯業部門ではセメントの生産(五二七千トン、六%増)は、東南アジア向輸出好調と内需活況見越しで上伸したものの、板硝子(四五六千箱、二二%減)は稼働日数減少と生産設備の定期修理のため大幅減産。

(5) 繊維部門は人絹糸(二二、六三七千封度、一%減)、スフ糸(一六、三六九千封度、四%減)の微減を除き、いずれも価格の強調、輸出成約増加、夏物実需期

入り等で、軒並みに増産、特に綿織物の九%増、麻織物の二二%増が目立つた。

(6) 機械工業は前月減産の後をうけて、扇風機(三三〇%増)変圧器、土木機械をはじめ、カメラ、双眼鏡等増産したが、全体としては特に顕著な動きは見られなかつた。

これを要するに当月生産は操業日数減少に加え、近年稀な異常渇水に遭遇したため、電力依存度の高い化学工業、金属工業中心に予想外の伸び悩みをみせたといえよう。

(発電量は自流低下のため前月比一〇%の低下、出炭好調、重油の需給窮屈化)

電力は昨年末来の渇水愈々著しく全国平均出水率は月中九一%に止まり、水力発電は一、八九〇万KWHと前月及び前年同期に比し一四%、昨年最豊水期(七月)に比し四〇%以上の減少をみせた。一方火力発電はフル運転を行つて一、一八〇万KWHと略々前月並みの実績を挙げたが、受電分を含めた事業用発電量合計は三、一六〇万KWHと前月比一〇%の大幅減少を示し、電力制限は一月以上に強化され各産業の操業にかなりの影響を与えた。

石炭は稼働日数が少なかつたにも拘らず、月中出炭高四、三一八千トン(前月比一・四%増)と計画量を三・六%上廻り、荷渡高も四、〇九〇千トン(三・五%増)と需給いずれも久方振りに四百万トン台を示し、昨年三月以来の実績を挙げた。実需最盛期にも拘らず荷渡が出炭高に及ばず、前年同月に比し二・八%の減少を示したのは、先安見越しの買控えもさることながら、輸入炭の到着順調(月中六二六千トンと戦後最高)による大口消費先の貯炭増加(月末二、八七三千トン、前月比三五八千トン、一四%増)に基づくところが大きく、月末の坑所・港頭・市場貯炭合計は一、四九八千トンと前月末比一六一千トンを増加、炭況は軟化の様相を次第に濃くした。

また石油は電力事情の制約、操業日数減少によつて精製量は四五五千軒(前月比三%減)と引続き減少したが、特に産業界の熱源転換に需要増大のB重油は一〇千軒と前月比一八%方著減したため在庫は二〇千軒と三二%方急減し、一部に重油輸入増大が要望されるに至つた。

(工場在庫は概して減少)

前記主要商品について工場在庫の主な動きをみると鉄鉄等一部商品を除いては概ね在庫減少し、内需中心ながら先ず順調な荷動きをみせた。すなわち、

(1) 繊維は輸出が稍々上伸を示したこともさることながら、夏物実需期を迎えて、内需一段と活況を示し生産を大きく上廻る出荷を見て、綿、人絹、スフ、毛、麻等原糸織物何れも軒並み在庫著減。

(2) 化学肥料も輸出船積(硫安四九千トン)旁々春肥需要期入りに出荷進捗して前月に引続き在庫減少。

(3) 普通鋼鋼材はこれまで既成約分の輸出船積と内需の増加に在庫減少、電気銅、亜鉛、セメント、洋紙、パルプ等も生産は若干増加せるも、これを上廻る出荷を見、いずれも在庫は減少した。

(4) 他方不需要期の板硝子(四九九千箱、前月比二六%増在庫率一・一)、政府の大量手持ちに圧迫されて過剰在庫慢性化の感がある電気鉛(八、六一四トン、三四%増在庫率六・〇)は減産に拘らず在庫増加、銑鉄も在庫漸増(一〇七千トン、五%増在庫率〇・四)をみせている。

三、食糧

(供出米は二七百万石を突破し、特別集荷米との合計量は政府集荷計画量に近接)

更年後供米は最盛期を過ぎて急激にスロウダウンし、当月中の供米量も五六二千石と前月比更に約六〇%減であった。しかし月末現在累計高は二七百万石を上廻り、前年同期比三、〇七三万石の増となっている。

一方本米穀年度より新設された特別集荷制に基づく集荷状況は依然として振わず、当月中集荷は一七五万石、月末現在累計高も四二二万石(うち農協系集荷四七・六%)に過ぎないが前記供出量の予想以上の好調により、両者の合計量では二七、四五一万石と政府集荷計画量(二七、五〇〇千石)に近接した。

(昭和二十七年中の農家経済現金収支は好転)

農林省調査(調査対象約三千戸)による、昭和二十七年中の全府県平均農家一戸当りの現金収支概算は収入約二三六千円(前年一八三千円)に対し、支出は約二

〇四千元(同一六〇千元)で差引収入超約三二千元と前年比約一〇千円の黒字増加を示している。この主因は豊作と生産者価格改訂に伴う米作収入増にあり、供米収入は約五二千元(同三八千円)と前年比約三七%増を示している。

四、貿易及び外国為替収支

(輸出実績は前月比やや増加せるも依然低水準)
大蔵省速報による二月の輸出実績は八六・八百万ドルと前月比七百万ドル(九・二%増)の増加を示した。品目別に見ると、船舶が前月増加の後を受けて約半減、木材また約一〇%の減少をみせたが、生糸、綿糸布、化繊織物、鉄鋼等はいずれも若干の増大を示し、最近不振をつづけてきたセメントも久方振りにかんがりの伸長をみせた。しかしながら当月の輸出額を前年同月に比較すると三一・三%の大幅減少、低調裡に推移した前年下半期の月平均輸出実績(九八百万ドル)をも一一・五%下廻っており、輸出水準の低位は掩い難い。

一方当月の輸出信用状接受高は左の如く前月を更に下廻る低調振りで、このような最近の輸出信用状接受状況並びに主要商品の成約状況から推して輸出の先行はなおゾリ貧を免れないものと見られる。

輸出信用状接受高の推移

(単位 千ドル)

年 月	合 計	内 訳		
		ドル地域	ポンド地域	オーブン勘定地域
昭和二十七年 上半期(月平均) 七・九月(月平均)	九五、五〇六	二五、二三〇	五〇、三九〇	一九、八八六
十月	九〇、二九八	三四、一六三	三三、五二二	二二、六一二
十一月	七七、八五六	三二、八〇二	二二、九三〇	二二、一二四
十二月	八三、三四六	二八、五二七	三一、八四一	二二、九七八
昭和二十八年一月	七九、四八三	三三、五一四	二五、五七一	二〇、三九八
二月	七五、六四一	三一、九三九	二〇、一八九	二二、五一三
	七四、七九二	二九、九四九	二二、五二〇	二二、三三三

(輸入実績は微減)

これに対し輸入実績は、同速報によれば一七四百万ドルと、前月比約四百万

ル(七・二%)の減少となつたが、輸入水準としては依然高く、前年下半期の月平均を一・二%、前年同月を一九%方上廻つた。品目別に見ると、石炭は前月比倍増の入着増加をみ、亜麻仁、コブラ等の油脂原料や燐鉱石、砂糖なども相当大幅の増加を示したが、米、麦、原綿、生ゴム等は引つづき入着減少、羊毛、バルブ、加里肥料等もかなりの減少を示した。しかしながらこれら主要品目の輸入額につき、前年同月と比較してみると原綿が約三六%の減少となつてゐるのを除いては、米八二・六%、麦七二・四%、生ゴム一・五%、羊毛一二・四%方、いずれも前年同月を大幅に上廻つてゐる。数量的にはこの間における輸入価格の低落によつて更に大幅の増大となり、金額の上で減少した原綿も数量的には倍増となつてゐる。

右のように輸出実績は前月比微増、輸入は逆に減少し、当月の通関実績上の貿易バランスは、差引八七百万ドルと前月の入超額一〇八百万ドルに比べ二二百万ドルの入超減となつた。しかし逆調の大幅なる点においては依然変りなく、輸入実績はちようど輸出実績の倍額に相当してゐる。

一方輸入信用状開設高は一四二百万ドルと前月につづいて漸減(前月比一二二百万ドル減)を辿つたが、しかしなお前年上半期のベース(月平均一三六百万ドル)を凌いでゐる。

輸入信用状開設高の推移

(単位 千ドル)

年 月	合 計	内 訳		
		ドル地域	ポンド地域	オーブン勘定地域
昭和二十七年 上半期(月平均)	一三五、五五五	七五、二七	三九、〇七	三三、三〇
七月(月平均)	一四九、三三五	八〇、七三	四七、六九	三〇、七九
七月九月(月平均)	二二二、九三三	二五、七六	六三、二七	三五、九七
十月	一七六、三〇〇	八〇、九元	五三、八九〇	四、四八
十一月	一五七、〇〇元	七、二九七	五九、六二五	三六、〇七
十二月	一五三、五五二	六三、五五	六〇、〇三七	三〇、一三
昭和二十八年一月	一四一、三四五	六二、二四九	五三、六三三	二六、四四
二月				

(外貨予算使用高急増と自動承認制輸入の調整措置)

右の如く当月の輸入信用状の開設高は、前月より減少を示したが、他方輸入承認高は著増を示し注目された。すなわち昨年十月三〇八百万ドルと異常な膨脹を示した輸入承認額は、その後砂糖輸入の一段落、食管会計資金繰の逼迫に基づく主食の買控え及び米綿手当の慎重化等のため、月一五〇一六〇百万ドル台に推移したが、当月は再び二一〇百万ドルと急増した。これは主として最近におけるポンドボジションの悪化に基づく先行輸入削減不安、予算期末を控へ自動承認制予算の残額僅少化等から手当が急がれたことによるものと認められる。特に自動承認制品目は予算残高の減少とポンド予算圧縮懸念から軒並みに申請が殺到、生ゴム、皮革、屑鉄、鉄鉱石、及び大豆等には一部思惑的輸入申請が窺われ、十四日ついにスターリング地域からの自動承認制による輸入申請の受付は停止の余儀なきに至つた。そのため次の如き自動承認制運用上の調整措置が講ぜられることとなり、(原本のまま) 予算追加の二十九日その受付が再開されたのが当月中における自動承認制による輸入承認額は一一七百万ドルと前月の五四百万ドルから飛躍的な増加を示した。すなわち

(イ) ドル地域に対しては担保比率を五%(従来三%)に引上げ、輸入承認証の有効期間を四カ月(従来六カ月)に短縮するほか綿実、ニッケル鉱等約五〇品目を削除し

(ロ) ポンド地域についても、大豆、牛脂等約一〇〇品目を削除し担保比率を五%(従来〇・一%)に引上げ、ドル地域同様、輸入承認証の有効期間を四カ月とし、特に思惑的な傾向の濃い生ゴム、屑鉄については担保比率を一〇%、輸入承認証有効期間を三カ月とする

(ハ) ドル・ポンド地域共に信用状の開設期限を設け、承認証取得後十日以内に信用状を開設する条件を附する

(特需契約高は引つづき順調就中物資契約の増加が顕著)

二月二日以降三月一日までの一カ月間における特需契約高は総額三三、九二三千ドルとほぼ前月並みの順調な受注状況を示した。そのうちドルベース契約は二七、二五三千ドルで前月にはわずかながら及ばなかつたが、昨年八月以降不振を

極めた物資契約が当月においては二七、三六七千ドルと極めて顕著な増加をみせたのが注目された。物資受注で目立つたものは、麻袋、ドラム罐等金属容器、組立テント、有刺鉄線、自動車部品、セメント、フェロマンガン等多方面にわたつた。
 (外国為替収支は概ね均衡)

次に二月中の外国為替収支状況を見ると受取は一五四百万ドルと前月比六百万ドル減、これに対し支払は前月比四三百万ドルの著減を示して一五五百万ドルとなりこの結果差引収支は百万ドルの支払超過にとどまり、前月の大幅払超に比べ著しい改善をみた。これは(イ)ドル及びオープン勘定の輸入の著減を主因として入超額が五四百万ドル(前月比三四百万ドル減)に減少したのに加え、(ロ)貿易外為替において駐留軍関係受取を主とする受超額がやや増加し、五三百万ドル(同六百万ドル増)に達したためである。かくて当月の外国為替収支は前月の著しいアンバランスに比し顕著な改善を示したといふことができるが、貿易収支における依然たる大幅の払超を軍関係受取を大宗とする貿易外収入で埋めている姿には依然変りはない。
 なお当月の収支状況を決済通貨別に見れば次の通である。

二月中外国為替収支

貿易 経常 内 資本 取 計	受			取			支			払			差引受払(△)超		
	合計	弗	磅	勘定	オープン	合計	弗	磅	勘定	オープン	合計	弗	磅	勘定	オープン
八七	四四	二〇	一四一	一五七	五九	二五	五四	△	一三	△	三六	△	一	五	
六七	六一	二〇	一四	一〇	三	一	五三	△	五一	△	一	一	一	一	
六六	六〇	四	二	八	三	一	五四	△	五二	△	一	一	一	一	
五六	五四	二	二	一	一	一	五六	△	五四	△	二	一	一	一	
一	一	一	二	二	〇	〇	一	△	一	△	〇	〇	一	一	
一五四	一〇五	二二	一五五	六七	六二	二六	△	一	三八	△	三五	△	四	四	

(単位 百万ドル)

(イ) まずドル為替は輸出が比較的好調に推移して四四百万ドル(前月比二百万ドル増)に上つたが、反面輸入は米綿及び米國、カナダ麦の決済一巡から五七百万ドル(同三〇百万ドル減)に減少をみたため入超額は一三百万ドル(同三二百万ドル減)に止まつた。一方貿易外においても軍関係受取が微増して貿易外受超額が五百万ドルに達しその結果貿易、貿易外を通ずるドル為替の収支は三八百万ドルの受超(前月比三五百万ドル増)となり、昨年六月以降の最高を記録した。

(ロ) ポンド為替収支は、輸出が引続き減退傾向を辿り、二三百万ドル(前月比六百万ドル減、二十六年年初来の最低)に縮小したのに対し、輸入はビルマ及びパキスタン綿の決済増加により五九百万ドル(同六百万ドル増、戦後最高額)の多額に達したため、入超額は三六百万ドルに及び、貿易外為替における受超一百万ドルを含め差引三五百万ドルの支払超過となつた。

(ハ) またオープン勘定においては、輸出は横這いで二〇百万ドル、輸入は二五百万ドルと前月比一四百万ドルの著減をみたため、差引入超額は五百万ドルで、貿易外の受超一百万ドルを加え結局収支は四百万ドルの払超を示した。

五、商況、物価

(商品市況は前月に引続き概して堅調、一部に思惑的需要も窺われる)

商品市況は石炭、鉛、錫等一部のものを除き、前月に引続き概して堅調な推移

を示した。すなわち

(イ) 綿糸布は、操短枠縮小(綿糸十二月一六五千個、一、二月一五〇千個)の一方、昨秋の暴落以来買控え傾向にあつた実需筋の夏物手当買いの増加があり、

更に特需の発註期待、綿糸買上機関の設立決定等の材料もあつて綿糸相場は八〇千円台乗せ、化繊も輸出成約の好調、夏物需要の増大に加え、人絹糸にあつてはメーカーの出荷調整もきいて強調を示した。他方毛も原毛相場の堅調に加え前述のごときポンド地域からの輸入抑制による原毛不足見越しから需要活潑化して相場上伸、生糸も横神において最終消費地禁止価格一杯の相場を示現したのみならず実際には更にそれを上廻る開相場さえ生ずる強調を示した。

(四) 鉄鋼は昨年後半引続いてかなりの好調を辿つた輸出成約が、米國鉄鋼ストの影響解消、メーカーの輸出採算主義への転換等に伴い漸く減退傾向を呈しているにもかかわらず、国内需要は相次ぐ大メーカーの販売価格の引上げに伴う手当急ぎもあつて順調、殊に操短により市中品がすれ気味の薄板及び線材は前月比千円方の騰貴を示した。

(五) 非鉄金屬では、これまで建値引下げ期待から買控え傾向の強かつた銅が、目先建値の改訂は行われなことが明かにされて常用買増加し、市中相場も漸騰。亜鉛、アルミにあつても、価格保合ながら荷動きはやや活潑化した。

(六) 一方木材、セメント等は依然堅調を持續し、特に合板は米國からの買付増大、特需発註等によりブーム的商状を呈した。

(七) また旧臘来生産過剰から下落傾向を強めていた砂糖市況も、下旬に入り原糖輸入削減見越しから反転顕著な立直りを示した。

(八) 化学肥料は春肥需要最盛期にもかかわらず硫酸安定帯価格の政策的引下げと、それに伴う春肥値決め待ちの模様眺めから荷動きの減少を来したが相場との基調は依然堅調であつた。

他方石炭は需給緩和の傾向いよいよ顯著となり輸入の増大、重油転換等も作用して先安人氣一段と強く市況も軟化、生ゴムも産地安と輸入増加からジリ安、また非鉄金屬中鉛、錫にあつても荷もたれ気配から相場下落、などの軟調面もあつた。しかし総じていえば市況は前月に引つづき予想外の堅調の裡に推移したといふことができる。この間供給面からの人為的な梃子入れ策が大きな支柱となつてゐることは既に前号にも述べた通りであるが、それと同時に各部門に亘つて思惑的需要の擡頭が認められることは注目せられる。すなわち、

(1) 綿糸布、化繊にあつては、夏物手当という実需の増加もさりながら、昨夏と同様の内需好調を期待した仮需要がかなり強くはたらいっていると認められ、(2) 鉄鋼においても、市況挽回策として八幡製鉄の鋼材建値引上げに追隨して先高見越しの手当急ぎがみうけられる。

(3) 更に毛糸、錫、生ゴム、砂糖など一部國際原料物資については、ポンドボジション悪化に基づく輸入削減見越しの思惑的買付の増大が顯著である。特に纖維にあつては証券筋の思惑買いに基づく清算相場の上昇が現物相場を異常に吊りあげている面もあり月末相場は需給の実勢を超えた高値と認められる。また鋼材のメーカー販売価格の引上げは、採算点への回復を目指しての措置といわれているが輸出のジリ貧から先行生産過剰が懸念せられる点よりしてかなり不安が濃く、輸入物資の動きも、今後の輸入政策によつては反動の危険を蔵していることを否めない。

(小売市況は順調に推移)

全國百貨店の月中売上高は、九、四五五百万円と昨年比百貨店一八・九%増、一般小売商店においても概ね一割乃至一割五分増の実績を取めたといわれ、小売市況は先ず順調な推移を示した。尤も地方(札幌、青森、秋田、仙台、鹿児島等)によつては昨年並み或いはそれを下廻る低調をかこつたところもみうけられた。なお小売筋では消費購買力の順調な伸び足に対応、旁々販売競争の激化もあり積極商内に出て春物中心に手持ちを厚くする傾向が顯著にみうけられた。このため売上げ増伸にもかかわらず、金繰りは却つて窮屈となつてゐる向きが多いようである。

(卸売物価は建築材料、纖維品を中心に〇・七%方統騰)

東京卸売物価は昨年十二月を底として上昇に転じ一月は一・八%上昇、二月も之れに引続き〇・七%の統騰を示した。一月の上昇は米価改訂等食料品関係の値上りに基づく所が多く、食料品関係を除外すれば上昇率は〇・三%に過ぎなかつたが、二月においては食料品関係を除外した上昇率は〇・九%と総平均を上廻り食料品以外の物資の値上り傾向を明瞭に示している。

次に品目別について見れば騰貴したものは建築材料(三・一%)、纖維品(二・

二%、化学製品(〇・六%)、燃料(〇・五%)、低落したものは金属類(〇・八%)、雑品(〇・二%)となつており、本月の物価上昇には建築材料と繊維品の値上りが響いたものと見られ、その値上り原因としては建築材料に就いては本月一日より平均一割方引上げられた貨物運賃の値上げ並びに需要増加が挙げられ、又繊維品に就いては市中の品薄と夏物手当の増加羊毛関係に見られる思惑買ひ等が指摘せられる。

(消費者物価も一・二%統騰)

東京消費者物価指数も総合指数において前月に引続き一・二%上昇した。即ち食料品指数は一・一%、雑費指数は三・〇%夫々騰貴、光熱指数及び住居指数は保合つたが被服指数は卸売物価指数の繊維品が騰貴したのに対し〇・六%の低下となつて注目された。之は小売については既製品の冬物処分等季節的事情が若干影響したものと認められる。

(輸出物価も反騰)

本行調輸入物価指数の動きに就いて見れば輸入物価指数は昨年引続き一月一・七%、二月〇・五%と続落しているのに対し、輸出物価指数は昨年は繊維品の下落により輸入物価指数以上の下落を示したが、本年に入りウエイトの半ばを占める繊維品が大幅に騰貴したため(一月四・〇%、二月二・一%)反騰に転じ、一月一・三%、二月一・二%と続騰を示している。

右の結果、輸出入物価指数の關係は、これまでも輸物価が輸入物価のそれを上廻る上昇を辿つて来たが、二月末では朝鮮動乱勃発前の基準時に対し輸出二九・四%高、輸入一二・六%高となつており、輸出不振の折から注目された。

(株式市況は基調を一変して大幅反落)

一月中異常な活況を呈した株式市況は二月に入るも熱狂的買気を見せ、出来高は激増して二日には二百万株を突破し、株価も奔騰して四日には東証ダウ平均四七四円四三銭と年初来の略々一カ月間に一一円方の大幅上昇を示した。かくして市場には天井接近感と高値警戒気分が漸次高まつてきたが、一方取引高の激増に取引所、証券業者とも事務処理に渋滞を来たし二月五日より前場立会時間を三〇分短縮することとなり、更に九日には神戸、札幌を除く全国取引所の臨時休

会を行わざるを得なくなつた。これらの措置は折から高値警戒気分の市況に嫌気投げを誘ひ、かくして四日を天井として五日より市況は軟化し始め、十一日から急反落に転じ十三日までの三日間に五二円四六銭と開所以来の記録的値下りを示した。

この急落は地場筋の投げを中心としたものであつたため、その後大証券の買支えと日証金の融資条件緩和の発表もあつて、十七日まで二四円四四銭を戻したものの市況は従来と一変して戻しには売りが続き基調の軟化は蔽い難い状況となつた。下旬に及んで二十四日非会員の業者中にへタ株売買の受渡し不能が生じ之れに引続き同様の事例が他の業者にも現われたため、市況は一層嫌気投げを誘ひ月末の株価平均は遂に四〇〇円台を割り月中一四・一%の低落となつた(但し月間平均では四・六%の上昇)。

以上の株価の反落は殆んど各業種銘柄一斉に現われたけれども、特に仕手株に著るしく又頃来軍需関係、資産再評価関係、その他諸種の思惑によつて支えられていた銘柄にも強く響き、ガス電力、食品、繊維等はこれらに比較すればその値下りの程度において若干軽かつたが、何れにしても今月の市況はこれまでの過当投機の反動が全面的に現われたものと言ふべく、市況の基調は本月に至つて完全に一変したことが指摘される。

二月中の投資信託の状況をみると、設定額は五一億円に上つたが反面部分解約が相当増加しており、又新規設定分に就いては最近の株価動向に鑑み現金設定分を極めて大きくしている模様であり、今後の株価の動きに関連してその運用が注目されている。

なお昨年十二月三日の水曜日後場立会中止以後再三の立会時間制限が行われて来たが、爾後出来高が減少し停滞していた受渡事務も通常に復したので二十三日から水曜土曜以外の後場立会が再開され三月五日からは完全に常態に復することとなつた。

六、財政、金融

(政府資金は引続き受超)

前月大幅受超に転じた政府資金の対民間現金収支戻は当月も引続き三三、九八

一百万円の受入超過となった。一、二両月の政府資金は既に八九、九〇六百万円の受超(前年同期比増三九、八三五百万円)に及び之れは前年一―三月間の実績(受超七四、七四七百万円)をも上廻るもので財政の引揚基調は予想外に強くその原因としては以下にも触れる如く税収の好調、外為の受超等もさることながら矢張り防衛関係費の支出不振がその主因をなしているものと認められる。

即ち主要会計の収支についてみると一般会計では租税収入四九、一四四百万円、専売流用現金一一、五九〇百万円と収入面が好調を辿る一方、支出面では地方財政平衡交付金一〇、三六二百万円、公共事業費七、七三三百万円が目立つたが、保安隊費(二、四三六百万円)をはじめ防衛関係費の支出は依然進捗せず差引二二、一六六百万円の受超となった。

予算に対する防衛関係費(講和関係費も含めて)の支出進捗状況は年度末を目前に控えた当月末においてもなお四〇%に止まり甚だ低調であり、防衛支出金(八二%)を除いては一般会計歳出総体の支出進捗率七三・六%(前年同期七五・二%)を何れも下廻つており、就中安全保障諸費、平和回復善後処理費、連合国財産補償費は殆んど支出されていない点が注目される。又進捗率の高い防衛支出金も予算の大部分が日米行政協定に基づき取極めにより毎四半期定期的に米軍に交付される関係によるものであるが、交付後支出されず、日米合同勘定に預金として滞留せる部分が当月末二八七億円にも及んでいるから実質的支出は三八%に過ぎない。かくて本月以降支出の促進を図るとしても年度内の支出実行は左程期待し難く、未支出予算の大部分が翌年度に繰越されるものと考えられる。

	予算現額(A) 百万円	二月末支出済額(B) 百万円	B/A %
防衛 支出 金	六五、〇〇〇	五三、五五九	八二・四
警察 予備隊 費	七〇、五三六	三三、四一五	四五・九
海上保安庁警備救難費	八、三一七	四、七七四	五七・四
安全 保障 諸費	五六、〇〇九	一、二三二	二・二
平和回復善後処理費	二一、〇一三	七・一五	三・四
連合国財産補償費	一〇、〇〇〇	三九・二	三・九
計	二三〇、八七五	九三、〇八七	四〇・三

(註) 国庫局調「二十七年各会計歳入、歳出予算進捗状況」による。予算現額は二十七年予算額と前年度繰越額、予備費使用額の合計。警察予備隊、海上保安隊は保安庁発足に伴い同庁に統合されたが、資料の関係上旧区分によつた。

一方予算額に対する租税収納進捗率は左表にみるとおり、主要税目については税収進捗が顕著であつた前年度に比べると稍々劣り、就中企業収益状況の悪化を反映して法人税の進捗低下が認められるが、他方賃金水準の上昇、消費の増大によつて源泉所得税、酒税等は順調である。ただ例年のことながら申告所得税の不調が目立つが、これとて前年度に比すればかなり好転しているばかりでなく、本年度の場合確定申告納期が三月月央(昨年度二月末)に延期されたことを考え併せると年度末までには相当伸びるものとみられる。かくて租税全体の進捗率は当月末九〇・〇%で前年同月末(九二・三%)には僅かに及ばぬものの、頃来の景況不振を考慮するならば税収は寧ろ好調にあるといふべく年度間を通じては予算額の確保はいうに及ばず、それを上廻る可能性も略々確実視されている。

所 得 税	二八年二月末	前年同月末
泉 源 税	八六・六%	八〇・四%
中 告 税	九八・一	一〇三・六
法 人 税	六二・四	五〇・四
酒 税	八七・九	一〇六・八
酒 税	九三・五	九六・〇
その 他 共 計	九〇・〇	九二・三

食糧管理会計は年度末を控えて借入金返済の必要上当月は農中前渡金の交付を全く行わぬなどの支払繰延措置をとつた関係から支払は輸入食糧代金を中心として一、四九七百万円に止まつたため、対民間収支は一五、三六二百万円の受超となり、月中借入金一四〇億円を減少した(借入金月末残高一、九四〇億円、内食糧証券一、三九〇億円、国庫余裕金繰替使用五五〇億円)。

外国為替資金では輸出為替等買取代金支払は前月並の低水準を辿つた一方、輸入為替等売却代金収入は輸入決済の減少から前月比一一、三四四百万円の激減を

示したため対民間収支尻は七、六三九百万円の受超に止まり、前月(受超一七、四二二百万円)に比して受超の度合は相当に低下した。なお対民間受払以外に防衛分担金等米軍小切手の買取が一、七八八百万円に及び更に日銀外国為替貸付関係の外貨売買等もあつたので総合収支においては二、〇四五百万円の受超となつた(前月比減七、六一二百万円)。

見返資金は月中二回にわたり保有長期国債二四〇億円を日銀に売却、その代り金中六〇億円を開発銀行に貸付けたが、残額は食糧証券の購入に充て余剰金として留保した。なお本年度見返資金運用計画上予定された長期国債売却(三〇〇億円)はこれを以て完了した。

(預金の不振著るしく、日銀借入は著増)

二月中における全国銀行勘定の動きをみると、貸出の増加もさること乍ら、預金の不振が著るしく、ために本行貸出の著増を止むなくし、頃来緩和の状況にあつたオーバーローンの進行が再び激しくなつた点において注目を惹いた。

即ち全国銀行の預金は表面残高においては月中二六六億円の増加を示したが、切手形形の残高を調整した実質預金においては逆に二〇億円の減少となつており年初来の推移を見ても、実質預金は四九億円の減少を見ており、昨年同期の増加(三三八億円)と比較するとその不振の甚しいのが注目される。これを預金種目別に見ると、当座預金は、月中一七九億円を増加しているものの切手形形を見合とすると粉飾を考慮すれば、増加の実質には寡からぬ疑問が抱かれる。これに對し定期預金は月中一五三億円の増加を示したが(前月中の増加額一九七億円)、昨年同期の一―三月各月平均二五八億円の増加を示し、その後も略々各月平均二四〇億円の増加を辿つて来た点を顧みれば増勢の不振は蔽い難いものが認められる。又大銀行、地方銀行別にこれを見ると、実質預金二〇億円の減少は十一大銀行において七億円の減、地銀、信託等において一四億円の減となつており、殆んど各行一様に不振が続けているものと認められる。而して月末預金残高と月央最低残高との差額が大となつている点(二月中三、〇〇六億円、昨年同月中一、五〇九億円)も見逃されないうところであり、これらを要するに粉飾預金の操作は益々激しく、実質預金の増勢不振をカモフラージュしている最近の状況が看過されない。

預金増勢不振の原因については財政の大幅揚超と共に、最近の情勢として相互銀行、信用金庫その他保全経済会等中小金融機関に普通銀行預金の一部が流れていく向きも各地に窺われるようであり注目すべき傾向と認められる。

一方貸出面をみると全国銀行の貸出は月中三七六億円の増加を示した。即ち原糸仕入資金、原棉引取資金、卸小売の春物手当資金及び酒造資金等季節的資金、特需資金、業況の好調を反映する電気機械の運転資金の外、鉄鋼、肥料、石炭等の増加運転資金、卸商社等の支払手形決済資金等を内容とする資金需要及び中小企業の納税資金需要等もあつたことにより輸入買手の減少、購置資金の回収等にも拘わらず二月としては相当の増加をきたしたものと認められる。

かかる情勢を反映して市中銀行の資金繰りとしては通月繁忙を呈し、地銀のコール回収等運用余資の引揚げがめだち、加うるに末端における営農資金需要を反映する農中の短期運用資金の回収九八億円、並びに政府指定預金の引揚三二億円もあつたため、日銀信用依存度は大銀行を中心として急激にたかまり、全国銀行の日銀借入金は、月中三八二億円(内大銀行三〇〇億円)を増加した。かくして農中等その他、取引先を含む本行貸出の増加は月中四一〇億円に及び、月末貸出残高は二、七四七億円と昨年十月以降の水準より著るしい上昇を示した。

(外国為替銀行の自己名義英磅勘定を通ずる為替取引及び外国為替銀行に對する英磅預託の実施)

先に米弗について実施された日本側外国為替銀行の自己名義外貨勘定を通ずる為替取引及び政府保有外貨の日本側外国為替銀行に對する預託措置を、英磅についても適用するため英国側と交渉の結果三月二日より実施することとなつた。その方式及び要領等は米弗の場合と同様(調査月報昨年八月号本年二月号

【二十七年六月および十二月国内経済概観】記載)であるが、英磅貨為替管理との關係から左の諸点において取扱いを異にしている。

- (1) 外国為替銀行の英磅勘定の運営については、直物及び先物を綜合した持高に對して売持となつてはならないこと(米弗の場合は直物についてのみ)
- (2) 預託金の使途は信用状開設に必要なマージン・マネー及び円貨決済が行われるまでの間の輸入手形の支払資金とし、米弗の場合と異なり在外商社のための

輸出前貸、輸入手形決済等の運用は差当り認められないこと

なお、今回の改正を機として、従来設けられていた英磅貨に関する在東京シャドウ・アカウント制度は廃止されることとなり、これに伴い英磅取引を扱う在日外銀は、在ロンドン店舗(自行乃至コルレス先の代理人たる地位においてこれを行うこと)となつた。

七、通 貨

(銀行券は一四億円の発行超)

月中銀行券の動きは、一四億円の発行超となつた。これは前記の如く、政資の大幅揚超にも拘わらず、本行の対民間貸出がこれを上廻つて伸張したため、二月中の通貨情勢としては昨年同月が九七億円の収縮をみた点、又一昨年同月が朝鮮動乱後のブームを映して二〇億円の膨脹となつている点などに鑑み稍々注目を引く現象であつた。然し本月中の銀行券増発の背景としては、最近の商況の堅調も若干の影響を持つものと思われるが、前月の収縮が極めて好調を示したあとでもあり、且つ当月末が偶々土曜日であつたことなども響いているとみられる。

昭和二十八年三月

国内經濟概観

一、概 況

二、生 産

生産活動は戦後最高水準を記録——自然流量増加のため電力事情著しく好転、石炭も戦後最高の出炭ながら需要低調——在庫は増減区々ながら、概して順調に推移

三、食 糧

本年度中の食糧輸入順調

四、貿易及び外国為替収支

輸出実績は前月比四〇%の増加——輸入実績は前月比九%増——特需契約高は急増——外国為替収支は引続き略々均衡——外貨予算使用引続き進捗——昭和二十七年中における外国為替収支状況

五、商況、物価

強弱区々ながら、ようやく頭打ち乃至反落様相窺わる——国際比価は重化学工業品の割高増大——小売市況は引続き順調——陸上輸送は概して円滑に推移、海上輸送は軟化傾向——卸売物価指数は保合——株式は国際政局急変に暴落

六、財政、金融

政府資金は引続き大幅受超——政府指定預金の預入、引揚期日の延長実施——第四・四半期中の資金運用部状況——昭和二十八年四、五月分暫定予算の概要——昭和二十七年中政府資金収支状況——指定預金の大幅預入にも拘らず日銀貸出は増加——銀行の預金粉飾の規制を要請——昭和二十八年前期造船融資成立

七、通 貨

銀行券は五一億円の還収超過

一、概 況

月初のスターリンソ連首相の死去、月末の中共周首相の朝鮮休戦会談再開の申入れは国際政局に新展開を齎すものとして世界的に多人の衝撃を与えたが、前月来順に環境悪化した我国株式市場は之を契機として暴落を演じた。商品市況は月末の繊維、ゴムなどの急落を除けば、一般には未だ直接の影響は見られなかつたが、年初来の堅調も頭打ちの形となり、今後海外情勢の推移によつては、漸次軟化も予想される状況となつた。

一方、鉱工業生産は電力事情の好転と年初来の比較的順調な商況に支えられて顕著な上伸を見せ、戦後最高水準に達した外、輸出船積も船舶及び繊維輸出の進捗を中心に好転、特需受注も物資関係を主として異常な活況を呈するなど、当面